

教 仁 名 聞

第86号
(発行日)
2017年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

お念仏と人生の問題

浄土真宗の教えは一言で申しますと、『歎異抄』にあります。すように、「本願を信じ念佛もうさば仏になる」教えです。もう少し詳しく云いますと、

阿彌陀仏の念仏往生の本願を信じ、正定聚に住し、浄土に生まれて仏になり、他の衆生を救う働きを無窮にさせていただく教えです。

そこで浄土に生まれて仏になるのは、凡夫の能力や行いをたよりにしては到底浄土に生まれることはできない、阿彌陀仏の本願によって救われて浄土に生まれさせていただくのであります。

ところが近代の人は「死後に地獄に落ちるのではなくて浄土に生まれたい」という問題意識(後生の一大事)を必ずしももちません。それで、お浄土といってもピンとこない人が多くなっています。

一方、真宗大谷派に清沢満之先生という先覚者がいました。先生は江戸時代の終わりの一八六三年に名古屋に生まれ、

文科大学哲学科(後の東京大学)に進み、哲学を学び、真宗の僧侶になられ、明治三十六年わずか四十一歳でなくなられました。

清沢先生は浄土真宗の教えを自分の現在の苦悩を通して学び、信受し、思索されました。清沢先生から学ぶものは多いのですが、その中に次のような言葉があります。これは先生の絶筆であった『我が信念』という文章に出てきます。それは

「言葉を慎まねばならぬ。行いを正しくせねばならぬ。法律を犯してはならぬ。道徳を破りてはならぬ。礼儀に違うてはならぬ。作法を乱してはならぬ。

自己に対する義務、他人に対する義務、家庭に於ける義務、社会に於ける義務、親に対する義務、君に対する義務、夫に対する義務、妻に対する義務、兄弟に対する義務、朋友に対する義務、善人に対する義務、悪人に対する義務、長者に対する義務、幼者に対

する義務等、所謂人倫道徳の教より出づる所の義務のみにても、之を實行することは決して容易のことでない。若し真面目に之を遂行せんとせば、終に不可能の歎に帰するより外なきことである。

私はこの不可能に衝き当りて、非常なる苦みを致しました。若し此の如き不可能の為に、どこ迄も苦しまねばならぬならば、私はとつくに自殺も遂げたであらうでしょう。」という言葉です。

実際、自分がすべき義務とか責任が日々課せられていて、他者に対する責任、家族に対する責任、社会に対する責任、弱者や困窮している人に対する責任などなど、いくらもある責任、それらを真剣にまじめに果たそう、問題に依って行動していかうとすると「できない」と壁にぶつかってしま

ます。それは時間がないからとかお金がないからだけではありません。健康体でないとか、家族に迷惑をかけるということもありましよう。またはそれをなんとかしなければならぬという使命感の弱さとか財や労を惜しむ心も影響を及ぼすでしょう、他者の非難が怖いという煩惱も起るからでもありましよう。それゆえ責任を果たそうとする行動にストップがかけられてしま

息か、あるいは「仕方ない」と開き直るしかありません。

ところが清沢先生は、人間として誠を尽くして責任を果たすべきであり、なんとかしなければならぬ、しかしどうにもできないとなつて、「真面目に之を遂行せんとせば、終に不可能の歎に帰する」よ

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(金) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇師

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

り外はなくなつてしまわれたのです。そして

「私はこの不可能に衝き当りて。非常なる苦みを致しました。若し此の如き不可能の為に、どこ迄も苦しまねばならぬならば、私はとづくに自殺も遂げたでありましょう」

とまで行き詰まられたのであります。

また清沢先生は何が真理であり、何が本当の善であろうかと徹底的にたずねていかれました。そのあげく、「何が善だやら悪だやら、何が真理だやら非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分かるものではない。我には何にも分からない」となられたのです。

このように清沢先生は日常生活の上での問題にぶつかられて苦悩され「なれない、できない、分からない」という壁にぶつかられたのであります。

このような問題は、私たちも日常的に悩んでいるのではないのでしょうか。もちろん清沢先生ほど突き詰めて考えたり悩んだりはしてないのが普通です。しかし大なり小なり、こういう壁にぶつからざるを得ないのが人生です。「今私は

どうしたらいいのか、これで

いいのだろうか。できないし

また分からない」という煩悩が人生でありましょう。ただ普通は妥協したり、言い訳したり、あるいは「凡夫だから仕方ない」と居直つたり、ごまかしたりで、その場その場を流されていつているのが現状です。清沢先生はどこまで

もうやむやにできなくてどうとう右にも左にもいけないほどに行き詰まられたのです。そして清沢先生はそのような困窮した状態において阿弥陀仏の救いを受け入れられたのです。それは『我が信念』の最後に

「無限大悲の如来は、如何にして私に此平安を得しめたまうか。外ではない、一切の責任を引き受けて下さることによりて、私を救済したもうことである。」

と述べておられます。そこに阿弥陀如来様の大悲の働きにであわれて安住の場を見出されたのであります。

では「できない、なれない、分からない」というような現実にはしばしば起こる問題と伝統的に浄土真宗で教えられてお念仏とはどういう関係があ

るのでしようか。

また日常、腹が立つ、憎む、悔しい、悲しい、後悔などの

煩悩、こうした煩悩が起こる私たち、「今私はどうしたらいいのか」「これではダメではないか」「これでいいのだろうか」などという戸惑いやさまざま

な不安、そういう私たちとお念仏はどう関係しているのでしょうか。

私自身も若い頃、こうした煩悩で一杯でした。その頃、京都の東本願寺の前に総会所というお説教ばかりがなされていた場所がありまして、そこで九州臼杵市の善法寺の住職をしておられた佐々木蓮麿

師のお説教を始めて（一九六三年）お聞きしました。師は伝統的な本願の念佛を信受されたばかりではなく清沢先生の信仰を最もよく理解しておられた希有なお方でした。

はじめて広い総会所にお参りし先生のご法話を聞いたのは十八歳の時ですが、仏間で幾人かの聞法者とともに畳にすわっていました。大きなお

内仏の横のふすまから先生はお念仏を申しながら出てこられてお話が始まりました。先生のお姿は柔和で静かで、真宗の尊い仏教僧という感じで

した。お話は「ただ念仏して

弥陀に助けられ参らすべしと善き人の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と

という歎異抄の第二章のお心をお話になりました。この第二章のお話は「佐々木のおはこ」といわれるほど、先生が何度も話されたものです。ですからご自坊である善法寺の

門徒さんは先生の法話は次にお話されるかまで知っておられました。

さてお話は佳境に進み、そしてお説教の壇上より「如来様は（そのまま念仏してこい、全ての責任は弥陀が引き受ける！）と仰せられる」と、あたかも阿弥陀仏が直接私たちに呼びかけるような迫力で話されました。まさに本願の勅命とはこういうことかと感じるほどでした。私は思わず南無阿弥陀仏と称えずにはおれなかつたのです。それほどの

勢いのあるお話でした。私は感動して法話の後、先生のお部屋にお邪魔し、先生から一対一でお話を詳しく伺ったのでした。

先生が叫ばれる「そのまま念仏してこい、汝の一切の責任を引き受ける」との仰せ、それが弥陀の本願の勅命であ

りますが、それは単に死後に

浄土に往生させるという内容

だけでなく、現在における人間の限界、苦悩、いきづまりに対して呼びかけたもう阿弥陀仏のご本願のお心でありました。

「分からない。なれない。できない、この私をどうしよう」と悩んでいる私に、「そのままなりで弥陀にまかせてくれよ、汝は称えるばかりよ」との阿弥陀仏の仰せは、伝統の真宗教義における本願念佛と清沢先生の無限大悲の如来のお救いとが一つになつて

いる仰せです。それをズバリおっしゃつた希有なお方が佐々木蓮麿先生でした。これは単に教義を学んで結び付けられたのではありません。伝統の本願念佛と清沢先生の信心とがまさに先生の中で体験的に

おのずと統合されて出てきたお言葉でした。

このことに関連して、私が大谷大学にいましたとき、当時学長をされていた松原祐善先生の研究室を訪ね、先生に「親鸞聖人の末灯鈔（ご消息）を学びたいのですが」とお尋ねしますと、松原先生は即座に「末灯鈔ならあんたの先生の

佐々木蓮麿師が一番だ」と語られたのはうれしかったで

す。実際、末灯鈔は親鸞聖人の信心がすこぶるよく表されているお聖教ですが、そこに述べられている聖人の念佛と信心のお心を実感的に理解されていたのが佐々木先生でした。善法寺に参りますとお内仏の経机の上に末灯鈔が置かれていましたので、常日頃からよく拝読されていたのだと思います。

繰り返しますが「我が名を称えよ」という本願の仰せは、往生浄土の問題ばかりか、日常の苦悩によりそって仰せ下さるお言葉であり、その仰せをとおして、「ああ阿弥陀様は私とともにいて下さる。私のすべてを引き受けて下さっている。ああ有り難い」と、おのずからお念仏が申され、大悲のお心が伝わってくるのであります。

このように浄土往生の本願念佛はそのまま現在の苦悩の私に「安んじておらせていただけ」場所を知らせ与えて下さる有り難いお念仏です。このお念仏に於て清沢先生の思し召しも同時に味わえるのであります。

(了)

相好ごとに百千の

(和讃問答)

相好ごとに百千の

ひかりを十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ衆生を仏道にいらしむる

(浄土和讃)

現代語訳（一々の諸仏の相好からおのおの百千の光を十方に放って、つねに弥陀の本願を説きひろめて、衆生を大いなるさとりに帰入せしめる）

* * *

D 「前の和讃からの続きで、お浄土の池の蓮の一々の花から三十六百千億の仏様が現れ出で、その一々の仏様の三十二相のお姿から百千の光明が十方に放たれる、といわれます。これらのお言葉を聞いて、浄土から無量の光明が放たれていて、浄土は光明無量であるという浄土の本質が少しなりともイメージされてきます。詩のように詠われてみると浄土のイメージがわずかでも湧いてきます。このご和讃の元

は仏説無量寿経に説かれてい

N 「イメージといわれますが、經典の言葉はそもそもどういう言葉なのでしょうか」

D 「經典は弥陀釈尊の説法のお言葉といつていいのですが、釈尊は真実そのものを覚り、覚られた真実と真実への道を説かれたのが經典です。真実そのものを真如といい、それは、私たちの思議分別を越えた純粹な真実あるいはその領域といわれています。そして、それを寿命無量・光明無量などあらわされます」

N 「真実の世界に対して私たち凡夫の領域は迷いの世界といわれますね」

D 「ええ、私たちは起こって来るあらゆる事象を時間・空間という枠組みのなかで、言葉で千々に分節し、そこにさまざまな状況を生み出しています。自分の思いでとらえた状況の中で悲喜苦楽し、本質的に憂苦の中にいる存在が私たちです」

N 「そういう迷いと苦しみの中にいる私たちに釈尊は説法されたのですね」

D 「ええ、迷える私たちに真実なる安らかなる世界を知らせ、そこへと導き入れようとして説かれたのが經典の言葉です。經典の言葉はありのままの真実から出て真実に帰入せしめようとされる言葉です」

N 「ということは迷いの世界から真実の世界に入れて下さる橋渡しのような言葉なのですね」

D 「ええまあそういうことです。仏教ではそれを真実方便などともいわれます。真実から出てきたお手立てだ」と

N 「では、ありのままの事象を私たちは言葉で分節しているとは」

D 「一瞬一瞬流動しつつある現前の事象にたいして、これはコップであるとか、これは机であるとか、あるいはAさんとBさんとか、天気だとか晴れだとか、さまざま言葉で一つの事象を区切り、勝手にそれらを是非善悪で価値づけ（いわば押しつけ）、好き嫌いの感情を加えて受けとっています。そしてたとえ目の前のコップなりを他の物とは別々に実体的にそれだけで

存在しているように思っ

N 「そういう見方をあらゆるものに対してしているのですね」

D 「ええ、人に対しても言葉で勝手に、善悪や優劣で価値づけ、好き嫌いでもって見ています。自分の思いや感情で判断し、あの人はこんな人だの、この人はこんな人だと自己中心的に決めつけています。決めつけ、思い込んだ人間像に自分が振り回され、またその人をも苦しめていくということが多いですね。目の前の一人の人は本当には何なのか、どういう人なのか。仏しか正確には分からないともいえま

N 「そうすると人を簡単に決めつけない方がいいですね」

D 「ええ、他者だけでなく、自分自身に対しても自分で自分を勝手に評価し、自分はこんな人間だとうぬぼれたり、自分はダメだと劣等感を持つ

たりして、自分の思いで自分を縛っていますね」

N 「日常的に私も思い込みで人を見る人が多いです」

D 「だいたい他者でも自分でも固定的なものでは無いのであって、一瞬一瞬変化しつづけるのです。同じ人でも十年前の人と十年後では心身共に変化しています。しかも日々善人になったり悪人になったりしています。腹を立てているときは悪人ですし、親切にしているときは善人になっています。いつもかつも善を為す人もいないし、いつもかつも悪ばかりする人もいないです。ですからこの人は善人だとか悪人だとかに固定的に価値づけられるものではありません」

N 「分節する場合、言葉でもって分けるとは」

D 「物事を判断する場合、言葉で考え言葉で判断しています。あれは〈花〉であり、あの花は〈梅〉だとか〈桜〉だとか、〈美しい〉と〈しぼんでいる〉とか、〈大きい〉とか〈小さい〉とか、みな言葉で捉え、判断し、他と区別し、そこに好き、嫌い、あるいは好きでも嫌いでもないという感情をかぶせてます。ですから言葉

で判断してことわけする前の〈事象アリノママ〉は私たちには分からなくなっています。分別した想念のベールでアリノママの事象を覆っているわけです」

N 「それで、知性で分別し判断する以前のアリノママの事象を真如といわれるのですね」

D 「そう聞きしています。そういう真如がもっている善き働きを真実功德といいますが、お浄土とか如来とかいうのは、そういう真如の妙なる善き働きを表した言葉です。真如を覚られた仏陀が私たちに真実功德の素晴らしい働きを如来とか浄土とかいうように人間の言葉で説き示して下さるのです」

N 「それが經典なのです」

D 「ええ、ですから、經典の言葉は、真実を真実と知らない私たちに、迷える考え(常識)に合わせながら迷える考えを真実の智見に転じて、真如の世界に入れようとされるのです。ですから經典は、私たちの常識の世界にまで入ってこられる言葉であると共に常識をこえた真実の世界を示される言葉です」

N 「すると經典のお言葉は、常識的な判断しかできない私たちにとって、分かる部分も

あるけれど分からない部分も当然あるということですね」

D 「ええそうです。常識的に分かる言葉と常識をこえている言葉の両方が混ざっている。常識の言葉を通して常識をこえた妙なる世界に導き引き入れようとされるのです」

N 「常識をこえている言葉というのは、人間の自己中心的な判断を越えた真実アリノママを直接に伝える言葉なのですね」

D 「そうですね、常識的な言葉だけですと、私たちにはよく分かるのですけど、いつまでも常識的な世間の中であり、そこを離れることはできません。また逆に常識をこえた領域(真如)ばかりを説かれたのなら、常識的な判断しかしてない私たちにはとりつく島がありません」

N 「そうするとお経は分かる部分もあり、分からぬ部分もあって、分かる部分を通して真実そのものに触れさせようとの釈尊の大悲の言葉なのですね」

D 「ええそうです」

N 「話が難しくなってきましたので、元に戻りますが、ここで妙法といわれていますが、これは弥陀の本願のことですね」

D 「ええそうです。如来浄土の光は弥陀釈尊の言葉となり名号となって、光明・名号をもって衆生を導き、私たちを仏道いわゆる大涅槃の道に入らせて下さるのです」

(了)

お便り

T・S氏のお便り。

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの十月号よりの続きです。)

はからいやまぬ間はハカラツテ良いのですよ。弥陀にまかせられぬ間はまかせられなくていいのですよ。時節が来たらいつの間にかはからいもやめ弥陀にまかせる意識なしにまかせてお念仏一つにならざるを得ぬことになる。いつでも、今のまんまでナンマンダ仏、これだけです。(木村無相)

*

☆私思う。ただ我々の救いは弥陀の願心が信ぜられるかどうかにあるのであり、我々のハカライ心やタノミ心は何の用もないことなのです。そのまんまが時節到来せば必ず果遂の誓いある

がゆえに弥陀の願心に頭が下がるときが来るでしょう。助かっても地獄、助からぬでも地獄、地獄一定が我々の立ちどころなのです。心配するな！我々が死ぬまで助からぬ悪性やめられぬと本当に弥陀の願心に信じられるかどうか弥陀の念仏に照らされるかどうかなのです。弥陀の願心が受け入れられたならば自然と念仏も申され候、念仏申されれば自然と助けられ候であります。

「歎異抄第一条」にあります。

「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんと思ひ立つところのおおるとき、すなわち撰取不捨の利益にあづけしめたまうなり。」

「この思いたつところ」こそ弥陀の願心が自分の絶対無能のためであったと弥陀より回向された信心なのです。これ以外にありません。この第一条こそが「歎異抄」全編を貫く精神なのです。この絶対の浅きが絶対の深き法の座りどころなのです。

確か「信者巡り」にこんな話がありました。「念仏称えぬお前も地獄行き、念仏称えるわしも地獄行き、それならなぜ称えるのかといわれれば、御恩思えば称えにやならぬ」と。(続く)

木村無相さんの法信9